

密教儀軌に見られる「破地獄」について

山口 真玄

一、はじめに

現在、真言宗智山派（以下、本宗）において用いられる『作法集』所収の「開眼大事」には「三身真言」（*サミヤマノミコト・サミヤマノミコト・サミヤマノミコト*）、または三種悉地の真言、三種真言などと称される。）^①が見られる。これは「開眼大事」の中核をなす、重要な真言である。この三種の真言は、善無畏訳と称され共に「破地獄」の名を有する三本の儀軌より取り入れられたとされている（以下、本稿ではこれら三本の儀軌を総称する場合、三本の「破地獄儀軌」と総称する）。しかし、いつ、どのような経緯でこの真言が「開眼大事」に取り入れられたか定かではない。^②

三本の「破地獄儀軌」に関してはこれまで多くの先行研究があり、特に松長【一九九八】はそれまでの先行研究を整理し、この儀軌に共通して説かれる思想とその起源について網羅的に論じている。筆者も三本の「破地獄儀軌」に見られる思想や、その起源に関して、先行研究に依るところが多い。

本稿では、これまでなされてきた三本の「破地獄儀軌」と「三身真言」（以下、「三種悉地の真言」と呼称する。）に関連する議論や、それに関連する知見を踏まえて、三本の「破地獄儀軌」における「破地獄」について見ていき、三本の「破地獄儀軌」間における展開過程も合わせて見たい。

二、三本の「破地獄儀軌」について

三本の「破地獄儀軌」とは、次の三本の儀軌である。

- ・『三種悉地軌』（『大正蔵』一八、九〇五番、具名『三種悉地破地獄転業障出三界秘密陀羅尼法』）
- ・『破地獄軌』（『大正蔵』一八、九〇六番、具名『仏頂尊勝心破地獄転業障出三界秘密三身仏果三種悉地真言儀軌』）
- ・『破地獄陀羅尼軌』（『大正蔵』一八、九〇七番、具名『仏頂尊勝心破地獄転業障出三界秘密陀羅尼』）

また、三本の「破地獄儀軌」と関連する経軌として、以下の二つを紹介しておきたい。

- ・『尊勝儀軌』（『大正蔵』九七三番、具名『尊勝仏頂脩瑜伽法軌儀』）
- ・『慈氏儀軌』（『大正蔵』一一四一番、具名『慈氏菩薩略修慈念誦法』）※『尊勝儀軌』と類本関係⁽⁴⁾。

これらは、善無畏訳と伝えられながら『大正蔵』所収の『開元録』・『統開元釈教目録』・『貞元録』といった中国の經典目録に記録されておらず、中国から日本への将来においてその記録を確認することが出来る。しかし、その記録も入唐八家（最澄・空海・常曉・円行・円仁・恵運・円珍・宗叡）の将来録にはなく、入唐八家の将来目録を整理した安然（八四一～八八九）の『諸阿闍梨真言密教部類総録』（『大正蔵』二二七六番。以下、『八

家秘録』に記録がみられる。

・安然『八家秘録』「蘇悉地部第四、儀軌法三二」（『大正蔵』五五、二二七六番）

尊勝破地獄陀羅尼儀軌一卷（是三種悉地法）⁵

この記事によって、日本への将来が確認できるが、将来者に関しての言及はない。こういった問題に対して、苦米地【二〇〇七】によれば、『八家秘録』は、必ずしも入唐八家の将来経軌の全てを網羅したものではないと指摘がなされている。⁶この観点からすれば、入唐八家諸師いずれかの将来であることも完全には否定できないが、いずれにせよ、三本の「破地獄儀軌」の成立と日本への将来に関しては、不明点が多い。なお、空海は「破地獄真言」なるものを将来している。その記録を確認したい。

・空海『根本大和尚眞跡策子等目録』（『大正蔵』五五、二二六二番）

破地獄真言一通⁷

この真言が如何なる真言なのかは、空海の『三十帖策子』において確認することが出来る。

・空海『三十帖策子』第二十九帖

破地獄真言 那謨 阿瑟陀^{二合} 矢昞喃 三葉三母駄俱昞喃 怛你也^{二合} 他 唵^引 吉呬那縛婆嘶 地哩 地哩

吽^引 泮^引 屹^引 娑縛^{二合} 賀^引⁽⁸⁾

この真言は、結論を先に言えば三本の「破地獄儀軌」に記されている真言とは異なった真言であるが、一応、空海が将来した破地獄真言が如何なる真言であるか確認したい。八田【一九八五】では破地獄の真言として、『大日如来剣印』所説の真言を記載している。

・『大日如来剣印』（『大正蔵』 八六四A番）

智矩如来真言 曩謨^引阿瑟吒^{二合} 始底南 三藐三沒駄^引 矩^{二引} 胝南 唵 枳孃^{二合} 曩嚩婆^引⁽¹⁰⁾
地哩地哩 吽⁽¹⁰⁾

『大日如来剣印』の真言⁽¹¹⁾ (namo aśṭāṣṭhān saṃyak-sambuddha-kotīṇaṃ om jñāna babhase dhīi dhīi hūm) は、空海が将来した破地獄真言とは若干の相違が見られるものの、近似性を有することが確認できる。しかし、先述したように、三本の「破地獄儀軌」所説の真言と、空海が将来した破地獄の真言との関連性は皆無である。⁽¹²⁾ 三本の「破地獄儀軌」所説の真言は、三種悉地の真言であるが、この三種悉地の真言を、抑も三種悉地とは如何なるものかとを合わせて確認したい。

○三種悉地と三種悉地の真言

三本の「破地獄儀軌」では共通して、上中下三種の悉地に阿鑊藍哈欠・阿尾羅吽欠・阿羅波者那の真言を、仏

の三身に配し、身体の三か所に観ずることが説かれている。これを『破地獄軌』の記事（『大正蔵』一八、九一三下）を基に図示すれば次のようになる。

	真言	仏身	身体
下品悉地（出悉地）	阿羅波遮那	化身	腰より足
中品悉地（入悉地）	阿微羅吽佉	報身	臍より心
上品悉地（蘇悉地・秘密悉地）	阿鏤覽哈欠	法身	心より頂き

これは『三種悉地軌』、『破地獄陀羅尼軌』も概ね同様の記事である。なお、『破地獄軌』では、この記事に続いて、

是の如くの三種悉地の真言は、仏頂尊勝の心真言にして、皆是れ大日如来三身の真言なり。これに依りて当に知るべし。尊勝仏頂とは、即ち是れ毘盧遮那如来の身、即ち是れ三部仏頂の身なり。¹³⁾

とある。三種悉地の真言をこのように解釈しているのは、三本の「破地獄儀軌」のうち、『破地獄軌』のみである。このような記事は仏頂尊勝陀羅尼との関連をうかがえるものであり、仏頂尊勝陀羅尼を踏まえた、新たな、三種悉地の真言による破地獄の思想が見て取れる。

さて、三種悉地の思想、そして三種悉地の真言は、三本の「破地獄儀軌」において初めて示されたものではない。これに関しては、松長【一九九八】、長部【一九七一A】が詳細に論じているので参照しつつ、三種悉地の思想、三種悉地の真言について見ていきたい。

○三種悉地

松長【一九九八】はまず「三種悉地とは、上品、中品、下品の三品の悉地をいう。それに仏部、蓮花（観音）部、金剛部の三部、あるいは息災、増益、降伏の三種法をあてたり、人間の身体の三力所すなわち腋（心）より頂まで、臍より腋（心）まで、足より臍（腰）までにそれぞれを配する場合もある。」¹⁴

と、三種悉地を定義している。続いて、三種悉地を説く代表的な經典として善無畏訳『蘇悉地經』をあげている。『蘇悉地經』の三種悉地の記事は

復次に、上中下の成就法とは、別に經の中に説くが如し。成就を求めんと欲する者は、須く真言の上中下法を解すべし。此の經に通じて三部所作曼荼羅を撰る法は、仏部真言扇底迦、觀音真言補瑟微迦、金剛真言阿毘遮嚧迦なり。腋より頂に至りては上品とす。臍より腋に至りては中品とす。足より臍に至りては下品とす。真言中に亦、応に三種の成就を分別すべし。此の三部に於て、各の分けて三とす。善しく須く了解すべし。¹⁵と、あることが知られる。なお、三種悉地を説く經典は他にも存在し、『蘇悉地經』と同じく善無畏訳の『蘇婆呼童子經』¹⁶や菩提流志訳の『一字仏頂輪王經』¹⁷、同じく菩提流志訳の『五仏頂三昧陀羅尼經』¹⁸にも三種悉地が説かれる。これらに見られる三種悉地は基本的に『蘇悉地經』のものと同系統であるとされている。¹⁹

ここでは、『蘇悉地經』等に見られる三種悉地を見てきたが、この三種悉地と同系統のものは、『大日經』第七卷、そして『大日經』第七卷よりも多少発展した類本である『要略念誦經』²¹等に見られる。このことから、この様な三種悉地は胎藏法系統の一種であることが指摘されている。²²ここまで確認してきたものが、先行研究に見られる三種悉地の定義である。なお、上品、中品、下品、の三品の悉地の規定は、『大日經疏』²³や『觀無量壽經』²⁴にも見られる。

さて、本稿冒頭に、三本の「破地獄儀軌」と関連する儀軌として『尊勝儀軌』を紹介したが、長部【一九七一B】は、三本の「破地獄儀軌」の三種悉地と、『尊勝儀軌』に記される有相悉地・無相悉地の記事に注目している。まず、有相悉地とは、

下悉地とは、長生不死なり。地仙中の王と為る。或いは世間一切の勝事、巧妙に赤白を合練し、種種の勝事、多聞・智恵・福德、具足せざる無くして、万万歳に住寿す。中悉地とは、隱形悉地の中に転輪聖王と為り、一劫に住寿せん。上悉地とは、加持する所の藥物器械等、三相を具現して、五地已上八地已來の菩薩の身を得証し、一念の間に無量の諸天、大梵天王、無量の帝釈天衆、毘沙門天等、各の無量の大威徳天衆を領し、一念の頃に迎來して、十仏刹微塵数の世界を過ぎて、一一の仏前に承事供養し、衆生の趣に隨つて衆生を化度せん。是の如くを説くものを名づけて有相悉地の法となす。²⁶⁾

とあり、次に無相悉地とは、

其れ無相の悉地とは、前の三種悉地を下悉地と為す。若し、無相の中悉地とは、或いは、本尊の身を得、若しくは応化身乃至十地位の菩薩の身を得るを号して中悉地と曰う。其の上悉地とは、三業即ち是れ三密、三密即ち是れ三身、三身即ち是れ大毘盧遮那如來の智なり。²⁷⁾

とある。このように『尊勝儀軌』には、有相と無相それぞれに分けた形での三種悉地が説かれる。長部【一九七一B】は、有相無相といった悉地相を三本の「破地獄儀軌」が記していないことから、『尊勝儀軌』との直接的な関係性を否定しているが、筆者は、三本の「破地獄儀軌」と『尊勝儀軌』は直接的に関係があるというよりは、三本の「破地獄儀軌」と『尊勝儀軌』が共に、仏頂尊勝陀羅尼の影響下にあったと考えている。次に、三本の「破地獄儀軌」に記される三種悉地の真言の起源を見ていく。

○三種悉地の真言

三本の「破地獄儀軌」で用いられている三種悉地の真言は、先述したように阿鏤藍咩欠・阿尾羅咩欠・阿羅波者那の三種である。『蘇悉地經』の三種悉地真言は、仏部真言・觀音真言・金剛真言とあるが、それらはどのような真言であるか、『蘇悉地經』の記事を見ると、

仏部心真言に曰わく

爾囊^上迦^{輕呼}

蓮花部心真言に曰わく

阿唎力迦^輕

金剛部心真言に曰わく

嚩日囉^{二合}特嚩^{二合}迦^輕⁽²⁹⁾

とあり、三本の「破地獄儀軌」の真言とは異なる真言であるため、三種悉地の真言の起源を『蘇悉地經』に求められない。では次に、三種悉地の真言の日本への伝来を確認したい。

最澄の『顯戒論縁起』を見ると

大唐秦岳靈巖寺順曉阿闍梨付法文一首

毘盧遮那如来三十七尊曼荼羅所

阿鏤藍咩欠 上品悉地

阿尾羅咩欠 中品悉地

阿羅波者那 下品悉地

灌頂伝授三部三昧耶阿闍梨沙門順曉、図樣契印法。大唐貞元二十一年四月十八日、秦岳靈巖寺鎮国道場の大徳内供奉沙門順曉、越府の峯山頂道場に於て、三部三昧耶を付し、弟子最澄に牒す⁽³⁰⁾。

とある。これには、最澄が中国において山東省靈巖寺の順曉阿闍梨より、三部三昧耶の真言として、三本の「破地獄儀軌」に見られる三種類の真言を授かったことが記されている。しかし、先ほど確認したように三本の「破地獄儀軌」は最澄の将来によるものではない。

三本の「破地獄儀軌」の三種悉地の真言の起源は、円珍（八一四～八九一）によって見出されている。円珍の『決示三種悉地法』には

唐貞元末年順曉阿闍梨、比叡山大師に付属する文に云わく、上品悉地 阿鐔嚩哈欠 中品悉地 阿尾羅吽欠 下品悉地 阿羅波遮那。伝授血脉、具さに彼の中の如し。

大唐東都水南天宮寺門の楼柱上題に云わく、法身真言 阿鐔嚩哈欠 報身真言 阿尾羅吽欠 化身真言 阿羅波麗娜。

大日経悉地出現品に云わく、南麼三曼陀沒駄喃阿尾羅吽欠（降伏四魔解脱六趣満足一切智智金剛字句と名づく）持誦法則品に云わく、阿鐔嚩哈欠（佉に空点を加う）字義を釈するは、彼の品の如し。金剛頂瑜伽中に別して文殊五字品及び五字陀羅尼頌等有り。又、貞観録に文殊師利五字真言經一卷を載す（二五紙なり）。此れ即ち第三応化身真言なり。³¹⁾

と、ある。円珍によれば、阿鐔嚩哈欠が『大日経』「持誦法則品」、阿尾羅吽欠が『大日経』「悉地出現品」、阿羅波遮那が不空訳の『金剛頂超勝三界経説文殊五字真言勝相』³⁴⁾や、同じく不空訳の『五字陀羅尼頌』³⁵⁾がその起源であるとされる。

なお、安然是『胎藏界大法対受記』において、最澄が受けた三部三昧耶の真言の典拠として、「尊勝破地獄法中に、此等三種悉地真言有」と述べた。よって、安然によって、三部三昧耶の真言が三種悉地の真言と結び付

けられたと言えよう。以上、三本の「破地獄儀軌」所説の三種悉地の真言、そして三種悉地について確認してきた、稿を三本の「破地獄儀軌」の成立事情に戻したい。

先述したように、三本の「破地獄儀軌」の成立と日本への将来に関しては不明点が多い。三本の「破地獄儀軌」に関する研究は、大村【一九一八】の研究がまずあげられる。大村【一九一八】では『三種悉地軌』の序分の「節度・觀察、旗旌の上に、真言を書写す」を引いて

即ち亦、密教支那化の徴しにして、此の儀軌、唐土に成ること明らかなり。亦、其れ無畏の撰述とするを疑い無しとすること能わず。且つ、命題の風を以て、これを推しはかり、及び、其の説く所に由りて、これを考えるに、其れ或いは中唐の作か。⁽³⁸⁾

と、中国での成立を指摘し、さらに善無畏撰述であることも疑問を示している。この大村の研究に続いて、以降、様々な研究が発表されてきた。⁽³⁹⁾

なお、覚鑑は『五輪九字明秘密釈』⁽⁴⁰⁾で、三本の「破地獄儀軌」のうち、『三種悉地軌』にしかみられない記事を引用しているため、覚鑑の時代に『三種悉地軌』が日本に存在したことは確実である。また、こういった事情から、三本の「破地獄儀軌」の日本成立を示唆する説もある。⁽⁴²⁾

以上確認してきたように、三本の「破地獄儀軌」の成立事情は未だ確定に至っていないのが現状である。これらの事実や先行研究を踏まえると、三本の「破地獄儀軌」の成立事情に関して、少なくとも次の点を指摘することが出来る。

・善無畏あるいは善無畏以降の者による編纂（編纂者は不明）の可能性がある。
・日本成立説も示唆されているが、直ちに中国成立を否定することも出来ない。

この観点と、善無畏訳と伝承され日本へ将らされた記録があることから、三本の「破地獄儀軌」は中国で編纂された痕跡があるため、三本の「破地獄儀軌」のうちの少なくともいずれか一本は中国成立と考える。また、三本の「破地獄儀軌」全てに「毘盧遮那経、金剛頂経、要妙を採集す」と『大日経』系や『金剛頂経』系の経軌の記事から要妙を切り取って編纂したとする記事があることから、三本の「破地獄儀軌」はサンスクリット原典の忠実な翻訳ではないと言える。なお、こういった編纂を示唆する記事は、『尊勝儀軌』にも「今、金剛頂、大毘盧遮那経、並びに釈義十卷。蘇悉地、蘇摩呼、如意輪、七俱胝、瞿薩旦那恒羅、不空罽索等の経を略して撰集す」といった同様の記事がある。

ここまで、三本の「破地獄儀軌」の成立事情に関して確認してきた。続いて「破地獄」について見ていきたい。なお、三本の「破地獄儀軌」に見られる記事については、松長【一九九八】によって、それまでの研究を踏まえた上での網羅的な成果があるため、その成果を参照しながら見ていきたい。

○「破地獄」について

三本の「破地獄儀軌」は共通して経題に「破地獄」とある。「破地獄」とは、例えば密教大辞典を見ると「仏菩薩の本誓・印・真言・陀羅尼の功力等によりて地獄を脱してその苦患を免がるを云ふ」とあるように、地獄

の苦を打ち破ることであるが、この思想は三本の「破地獄儀軌」に初めて説かれたわけではなく、諸經典に見ることが出来る⁽⁴⁶⁾。

破地獄に関して松長【一九九八】は、諸經典に見られるものとして『仏頂尊勝陀羅尼經』⁽⁴⁷⁾、『宝篋印陀羅尼經』⁽⁴⁸⁾、『隨求陀羅尼經』⁽⁴⁹⁾、『廣大宝楼閣善住秘密陀羅尼經』⁽⁵⁰⁾、『一字仏頂輪王經』⁽⁵¹⁾をまずあげ「それぞれの陀羅尼を誦したり、塔を建てたりする功德の一つに、破地獄があげられている」と指摘している。また、『不空羂索神變真言經』⁽⁵²⁾所説の光明真言によるもの、さらに『觀自在菩薩隨心呪經』所説の破地獄の印の記事をさらなる密教經典に見られる破地獄の思想として述べ、これらをまとめて「要するに陀羅尼の誦誦もしくは結印の功德によって、罪障を消滅し、身を清浄ならしめ、衆生を地獄より救出し、もろもろの苦惱から脱却せしめることを破地獄という⁽⁵³⁾」とし、さらにこれらの破地獄の真言は仏頂尊勝陀羅尼の系統をひくものが多いことを指摘している。

ここまで確認してきたように、破地獄の思想は三本の「破地獄儀軌」に初めて説かれたわけではなく、諸經典に見られる思想である。それらは一貫したものではなく、地藏菩薩、阿弥陀如来によるもの、光明真言等の諸真言や仏頂尊勝陀羅尼によるもの等、様々な存在している。それでは、三本の「破地獄儀軌」所説の破地獄は如何なるものか見ていきたい。

『破地獄陀羅尼軌』の序文には

金剛鼓と名づく。口を開き、舌を挙げて法界宮を震わせば蓮華藏の諸如来出定す。即ち地獄を摧破し、七編の殃を滅するを以て、起教菩薩（善住天子なり）に、五字の秘密の本を執るを説いて授け、如法に布字す。人主冠中に頂戴せば、万国清泰なり。節度觀察、旗旌の上に真言を書写せば、四方晏清なり。専城の太守は鎮遏して戎を総べる。鼓角上に字を題し嚴警せば、遠く聞こえて妖氣潜む。熾盛にして千里に布けば、苗稼

洪潤にして、人に災疾なし。地土神祇、風恬雨順なり。瑜伽事法に約して千条あり。略して少分を述べん。
念誦加持せよ。戦鼓の上に書けば、賊軍自ら降り、一人として損せず。⁽³⁶⁾

とあり、真言を国の君主が頂戴すれば、国家は泰平になると示している。国家の泰平や風雨順時であることは、国を治める君主の願うことであり、中国思想ではそのような現世利益を願うものが多く見られる。また、「節度觀察」とあるが、これは節度使・觀察使を指した記事である。節度使は、唐の軍職であり、軍政のみでなく民政・財政権をも兼ねた強大な権限を有していたが、宋の初めに廃止された。⁽³⁷⁾ また、觀察使は唐代の地方官のことを指していると考えられる。⁽³⁸⁾ よって、この記事は中国において制作された可能性を示唆している、と考えられよう。⁽³⁹⁾

『三種悉地軌』と『破地獄陀羅尼軌』の序文を比較して特筆すべきは、『三種悉地軌』では「七編の殃」や「起教菩薩」の記述がないことである。この点に関しては後述したい。

『破地獄陀羅尼軌』の序文において問題となるのが、「五字の秘密」の「五字」、そして「真言」が如何なる真言であるかこの記事だけでは不明な点である。この問題に対して『破地獄軌』の序文を見ると、

摩訶毘盧遮那如来、金鼓の説、口を開き舌を挙げれば、法界宮殿を震わし、蓮華台藏世界は、諸の如来の出定なり。即ち以て地獄を摧破し、七遍の殃を滅す。起教菩薩をして五字の秘密を説かしむ。この五字は阿鑊覽哈欠なり。⁽⁴⁰⁾

とあり、五字が阿鑊覽哈欠であることがまずわかる。また「真言」の問題に対しては、三本の「破地獄儀軌」が阿鑊藍哈欠・阿尾羅咩欠・阿羅波者那の三種の真言、いわゆる三種悉地真言の教理を共に記すことから、ここでの「真言」とは、阿鑊藍哈欠・阿尾羅咩欠・阿羅波者那の三種の真言であると言える。

以上、三本の「破地獄儀軌」が記す破地獄の思想は、これまでの諸經典に見られる破地獄の思想とは、様相が

異なる。また、三種の真言を用いている点からしても、空海が将来した破地獄の真言とも全く別の真言である。

経題に「仏頂尊勝心」とある『破地獄軌』と『破地獄陀羅尼軌』は、序分に「七編の殃」や「起教菩薩」の記述がある。さらに『破地獄陀羅尼軌』は、割注ではあるが「起教菩薩」を「善住天子」と解釈している。善住天子の因縁による破地獄の思想は、『仏頂尊勝陀羅尼經』に説かれるものである。⁽⁶²⁾

仏頂尊勝陀羅尼の因縁譚に関しては佐々木【二〇一一】に詳しい。佐々木【二〇一一】では、陀羅尼が説かれた由縁（因縁譚）をとく『仏頂尊勝陀羅尼經』には、

・仏↓善住天子⁽⁶³⁾

・無量寿如来↓觀自在菩薩

の二種の系統があることを指摘している。また、仏↓善住天子の系統の因縁譚の概要を次のように整理している。⁽⁶⁴⁾

- ① 仏は比丘衆や菩薩とともにインドのシュラーバステイーに滞在していた。
- ② 三十三天で享樂にふける善住天子は、ある夜、「汝は七日後に死に、悪趣等に七度生まれ変わり苦しみ続ける」との声を聞き、恐怖に震え上がった。
- ③ 相談をもちかけられた帝釈天（インドラ）は、善住天子を苦境から救い出すため、シュラーバステイーに滞在する仏を訪ねた。

④帝釈天の話を聞き終わって、仏は頂上より大光明を放って、三千大千世界を照らし出し、その後に仏頂尊勝陀羅尼を説き示した。

⑤仏は、この仏頂尊勝陀羅尼の由来や利益、またその実践法について説いた。

⑥善住天子は、仏頂尊勝陀羅尼を七日間実践し、死の危機を回避した。

この中で、②は三本の「破地獄儀軌」に関連することであると考えられる。そこで、実際の記事を仏陀波利訳『仏頂尊勝陀羅尼經』で確認したい。

『仏頂尊勝陀羅尼經』には、

爾の時三十三天、善法堂會に於て一天子有り。名づけて善住と曰う。諸大天と與に園に遊びて觀じ、又、大天受勝尊貴と諸天女と前後に圍繞す。歡喜して種種の音楽を遊戲し、共に相娛樂して諸快樂を受く。爾の時善住天子、即ち夜分に於て声有るを聞いて言わく、「善住天子、却ること後七日にして命將尽きんと欲う。命終の後、瞻部洲に生じ、七返畜生の身を受く。即ち地獄苦を受け、地獄より出でて人身を得んことを希つて、貧賤に生じ、母胎に処して即ち兩目無し」と。爾の時善住天子、此の声を聞き已りて、即ち大いに驚怖し、身毛皆豎ちて愁憂して樂します。速疾に天帝釈所に往詣す。悲啼号哭し、惶怖計り無し。帝釈二足尊を頂礼し已りて、帝釈に白して言さく、「我が所説を聴きたまへ。我れ諸天女と共に相圍繞して諸快樂を受く。声有るを聞く。「言わく善住天子、却ること後七日にして命將に尽きんと欲う。命終の後、瞻部洲に生じ、七返に畜生身を受く。七身を受け已りて即ち諸地獄に墮す。地獄より出でて人身を得んと希うに、貧賤家に生じて兩目無し」と。天帝、云何が我をして斯苦を免ずることを得しむるや、」と。⁶⁵⁾

とある。このように三十三天（忉利天）の諸天子中の一人である善住天子は、七日後に死に、その後、七返閻浮提において畜生の身を受け、後に地獄に墮ちることを宣告される。これを大いに恐れた善住天子は、帝釈天に相談するのである。善住天子に相談を持ちかけられた帝釈天は、

仏前に胡跪して仏に白して言さく、「世尊、善住天子は云何んが当に七返の畜生惡道の身を受くるや」と。⁶⁶
 と、仏に相談する。帝釈天からの相談を受けた仏は、

仏、便ち微笑して帝釈に告げて言く、「天帝、陀羅尼有り。名づけて如来仏頂尊勝とす。能く一切の惡道を淨め、能く一切生死の苦惱を淨除し、又能く諸の地獄閻羅王界畜生の苦を淨除す。又一切の地獄を破し、能く善道に迴向す。天帝、此の仏頂尊勝陀羅尼、若し人有りて一經を耳に聞けば、先世に造る所の一切地獄の惡業、悉く皆消滅して當に清淨の身を得べし」。⁶⁷

と、仏頂尊勝陀羅尼を授け、これによって地獄の苦から逃れることを説き示すのである。

以上これまで見てきたように、三本の「破地獄儀軌」に説かれる破地獄の思想は、仏↓善住天子の系統と考えて相違ない。三本の「破地獄儀軌」は仏頂尊勝陀羅尼による破地獄を踏まえて、陀羅尼ではなく、三種悉地の真言による新たな破地獄の思想を再構築した。これは経題に「仏頂尊勝心」とある『破地獄軌』と『破地獄陀羅尼軌』が、序分に「七編の殃」や「起教菩薩」の記述があり、これを善住天子と解釈していることから明らかである。

また、『破地獄軌』は末文に、

若し人有りて、此の説、不定の疑心あらば、無量不可思議恒河沙・阿僧祇・無數の大劫を経て、阿鼻地獄の中に墮落す。若し纔に彼の地獄の劫を尽して出だする者、また十八地獄及び八万四千の地獄の中に入らん。

是くの如く伝え伝わりて、各の一切の尽劫を経て、餓鬼の中および畜生の中に墮し、各の其の劫辺を尽くし、劫尽き已りて人間に生じ、法を信ぜざるが故に、貧窮極苦し、一生の間に無数の大病を受け、無門画夜に、是の如くの病に苦しむ。一善をも修せず、命終の後、また阿鼻地獄の中に墮す。是の故に大苦悩を受けて善所に生ぜず。故に不信の者には、為に此の三真言、三身仏果、三菩提の良薬を説くべからず。⁶⁸⁾

と、地獄に関する言及が多くなされている。このような地獄に関する記事は、『三種悉地軌』、『破地獄陀羅尼軌』には見られない。このことから、三本の「破地獄儀軌」において、『破地獄軌』が最も地獄を意識して編纂されたと見ることができる。なお、この「七遍の殃い」の記事は、先述した『尊勝儀軌』にも「七遍畜生の身」とあり、三本の「破地獄儀軌」と『尊勝儀軌』が共に、仏頂尊勝陀羅尼の影響下にあったことを示唆している。

三、まとめ

以上見てきたように、「三本の「破地獄儀軌」における「破地獄」は、三種悉地の真言による破地獄であり、三本の「破地獄儀軌」独自の破地獄の思想である。これは、一群の『仏頂尊勝陀羅尼經』に依拠する仏↓善住天子系統に由来する破地獄思想である。

覚鑊の『五輪九字明秘密釈』において、内臓の五処に阿鑊覽哈欠の五字を配当するといった「五臓観」の典拠となっているのは三本の「破地獄儀軌」の中でも『三種悉地軌』である。先に触れたように、『三種悉地軌』には「七編の殃」や「起教菩薩」（善住天子也）といった記事がない。そこからさらに、『三種悉地軌』には、五臓観の典拠となるような記事が付加されたと考えることも出来る。これは、直ちに断定することは出来ないが、こういった点に三本の「破地獄儀軌」の日本的展開を見出せるのではないか、可能性を提示しておきたい。

また、三種悉地の真言の日本的展開として、この真言が「開眼大事」に取り入れられたのは言うまでもない。しかし、いつ、どういった経緯でこの真言が「開眼大事」に取り入れられたのか、詳細な過程は見いだせないが、今後も課題として注視したい。

《参考文献》

- 上田【二〇〇八】…改訂『真言密教事相概説―諸尊法・灌頂部―下』（同朋舎、二〇〇八）
- 大村【一九一八】…大村西崖『密教發達志』（仏書刊行会図像部、一九一八）（一九七二年復刻）
- 小崎【二〇一六】…小崎良行『尊勝仏頂脩瑜伽法軌儀』『尊勝真言持誦法則品』について』（『智山学報』六五、二〇一六）
- 小崎【二〇一八】…小崎良行『善無畏皈依の経軌成立過程について』（『印度學佛敎學研究』六七―一、二〇一八）
- 小崎【二〇二三】…小崎良行『漢訳經典・儀軌の成立事情…善無畏訳を中心として』（『現代密教』三三、二〇二三）
- 長部【一九七二】…長部和雄『唐代密敎史雜考』（神戸商科大学経済研究所、一九七二）
- 長部【一九七一A】…長部和雄『漢訳三種悉地法の系譜』（『唐代密敎史雜考』所収、神戸商科大学経済研究所、一九七一）
- 長部【一九七一B】…長部和雄『唐代後期胎藏系密敎教学の二流派と三種悉地法』（『唐代密敎史雜考』所収、神戸商科大学経済研究所、一九七一）
- 神林【一九三二】…神林隆浄『破地獄三種悉地法解題』（『国訳一切経』大東出版社、密敎部三、一九三二）
- 小宮【二〇二〇】…小宮俊海『「開眼大事」について』（『現代密敎』三〇、二〇二〇）
- 佐々木【二〇〇九A】…佐々木大樹『仏頂尊勝陀羅尼概観』（『現代密敎』二〇、二〇〇九）
- 佐々木【二〇〇九B】…佐々木大樹『漢訳尊勝儀軌の研究―特に『尊勝仏頂脩瑜伽法軌儀』を中心として』（『大正大学綜合佛敎研究所年報』三一、二〇〇九）

佐々木【二〇一一】：佐々木大樹「仏頂尊勝陀羅尼の因縁譚をめぐる一考察―特に『悪趣清浄タントラ』との関係を中心に―」〔密教学研究〕四二、二〇一一。

二〇一一。

陳【二〇〇九】：陳金華〔Legend and Legitimation〕

～The Formation of Tendai Esoteric Buddhism in Japan～（二〇〇九）

苦米地【一九九八】：苦米地誠一「大藏經全解説大事典」所収「三種悉地破地獄転業障出三界秘密陀羅尼法」

解説（雄山閣出版、一九九八）

苦米地【二〇〇七】：苦米地誠一「諸阿闍梨真言密教部類総録」

解題「真福寺古目錄集」二、二〇〇七

那須【一九九七】：那須政隆「破地獄儀軌について」（那須政隆著作集）一卷所収、法蔵館、一九九七

朴【二〇〇九】：朴竣奭「唐末中国密教と入唐僧による日本将来の研究」（博士論文（大正大学）甲第五九号、二〇〇九）

〇〇九）

八田【一九八五】：八田幸雄「真言事典」（平河出版社、一九八五）

松長【一九九八】：松長有慶「三種悉地と破地獄」（松長有慶著作集）三卷所収、法蔵館、一九九八。※なお、

当該論文初出は『密教文化』一二二、一九七八

松永【一九二九】：松永有見「三種悉地破地獄儀軌の研究」（密教研究）三五、一九二九

三崎【一九八八】：三崎良周「台密の研究」（創文社、一九八八）

三崎【一九九五】：三崎良周「台密の師祖伝教大師の密教思想」（『密教大系』六卷所収、法蔵館、一九九五）

註

(1) 本宗『作法集』所収の「開眼大事」に関しては、小宮【二〇二〇】を参照頂きたい。

(2) 上田【二〇〇八】は「この三種真言を誦ずることにより上中下の三種悉地を成就し法報応の三身を成就する。この三身は法身毘盧遮那の体であり、五部（金）三部（胎）の源であると説かれている。したがってこの真言を開眼作法に用いることは、新仏を両部不二、三身即一の法身の体となすためである」と指摘している。上田【二〇〇八】四一七～四一八頁

(3) 長部【一九七一B】、小崎【二〇一八】等参照。

(4) 佐々木【二〇〇九B】参照。

(5) 『大正蔵』五五、一一一七上

(6) 苦米地【二〇〇七】、六一〇頁。

(7) 『大正蔵』五五、一〇六八中

(8) 『弘法大師真蹟集成』第二帙（法蔵館、一九七三、一二三頁）

(9) 松長【一九九八】、二三八頁。

(10) 『大正蔵』一八、一九六中、二〇〇下

(11) 八田【一九八五】ではこの真言を「かり火が一切を焼尽し光を発するのに喩えて、智火が煩惱を焼尽して智の世界を開いていくことを示す真言で、破地獄の真言として唱え

られる。」(八田【一九八五】事典番号、四三〇)と、解説している。

- (12) 朴【二〇〇九】では、三本の「破地獄儀軌」所説の三種悉地の真言と同様の真言である、三部三摩耶の真言を、最澄に授けた順眺によって、空海が真言の書面だけを直接受けた可能性を示唆しながらも、松長【一九九八】の指摘している通り、空海が将来した破地獄の真言と、三本の「破地獄儀軌」所説の三種悉地の真言は異なったものであるため「三十帖策子」に破地獄の真言が記されているからといって、空海が三種悉地の真言を知っていたことにはならないのであり、三種の破地獄儀軌との関連性についても何の手掛かりにもならない。」と指摘している。(朴【二〇〇九】、一三二頁)

- (13) 『大正蔵』一八、九一三下
(14) 松長【一九九八】二三九頁
(15) 『大正蔵』一八、六〇三下
(16) 『大正蔵』一八、七一九上
(17) 『大正蔵』一九、二三五下、二三七上、二六一下、二六三上
なお松長【一九九八】は、『字仏頂輪王経』には、三種悉地として天上、虚空、地上の三悉地を説く箇所(『大正蔵』一九、二六三上)もあることを合わせて指摘している。
- (18) 『大正蔵』一九、二七二下
(19) 松長【一九九八】二四〇頁
(20) 『大正蔵』一八、五二上・五三上

- (21) 『大正蔵』一八、六二上
(22) 松長【一九九八】二四〇頁

- (23) 『大日経疏』の上品、中品、下品、三品の記事は次の如くである。「此の中に悉地宮と言うに、上中下有り。上は謂わく密厳仏国にして、三界を出過して二乗の見聞し得る所に非ず。中は謂わく十方淨厳、下は謂わく諸天修羅宮等なり。若し行者、三品の持明仙と成らん時、是の如くの悉地宮の中に安住せば、當に此の喻を以て觀察すべし。海気日光の因縁をもて、毘居嚴麗にして層臺の人物、燦然として観るべきが如く、彼の愚夫の妄りに貪著を生じて、其の实事を求むるに同ずべからず。此の因縁を以て、種種の勝妙の五塵の中に於て、淨心、罣礙する所無きなり」(『大正蔵』三九、六〇八上) このように、『大日経疏』所説の三品は明らかに階位が存在する。

- (24) 『観無量寿経』では、上品、中品、下品それぞれに、上生、中生、下生があり、九品となっているが、三品が説かれる。また『大日経疏』同様、三品に階位がある。(『大正蔵』一二、三四四下、三四六中)。
- (25) 長部【一九七一B】、小崎【二〇一八】等参照。
(26) 『大正蔵』一九、三八〇上
(27) 『大正蔵』一九、三八〇上
(28) 長部【一九七一B】二二六頁、二三二頁
(29) 『大正蔵』一八、六一五下
(30) 『伝教大師全集』一、二七九、二八〇頁

- (31) 『大仏全』(仏書刊行会) 二七、九八五頁
- (32) 『大正蔵』一八、五二中
- (33) 『大正蔵』一八、二〇上
- (34) 『大正蔵』二〇、七〇九中
- (35) 『大正蔵』二〇、七一六上
- (36) 『大正蔵』七五、九八中
- (37) 『大正蔵』一八、九〇九中(『三種悉地軌』・九二四下(破地獄陀羅尼軌))。『破地獄軌』には同様の記述が見られない。
- (38) 大村【一九一八】四三三頁、四三三頁。
- (39) 神林【一九三一】、松永【一九二九】、長部【一九七一】、那須【一九九七】。さらに、松長【一九九八】ではこれらの儀軌の撰述は最澄・空海の帰国した八〇四年ないし八〇五年以後、蘇悉地隆盛の八三〇年代以前に置くことも可能であるとしている。(松長【一九九八】、二四九頁)。
- (40) 三崎【一九九五】は『破地獄儀軌』は安然の『胎蔵界大法対受記』に始めて引用されていることから唐末の成立であるとし、法全の時代よりも降るものであるとしている。また、日本への将来に関しては、「入唐八家以外の何人か、あるいは商船によって齎されたのかも知れない。」と指摘している(三崎【一九九五】二九〇頁)。
- (41) 『興教大師全集』下巻、一一二頁、一一八二頁
那須【一九九七】二六頁。苦米地【一九九八】二六九頁、参照。
- 覚饒は『三種悉地軌』の記事(『大正蔵』一八、九〇九下、九一二上)を引用または依用し、五字・五輪・五臓を説明している。(『興教大師全集』下巻、一一三九―一一五三頁)。
- (42) 三本の『破地獄儀軌』のうち、『三種悉地軌』と『破地獄軌』が日本で編纂された可能性を示唆している研究もある。苦米地【一九九八】参照。さらに、三本の『破地獄儀軌』の最新の研究として、陳【二〇〇九】のものがあ。その中で、三本の『破地獄儀軌』が日本で成立したことが指摘されている(陳【二〇〇九】参照)。
- (43) 『三種悉地軌』、『大正蔵』一八・九一〇頁中・『破地獄軌』、『大正蔵』一八・九一二頁中・『破地獄陀羅尼軌』、『大正蔵』一八・九一五頁上
- (44) 『大正蔵』一九、三七七下
- (45) 『密教大辞典』一七九九頁
- (46) 『望月仏教大辞典』一〇、補遺Ⅱ、八一〇頁(世界聖典刊行協会、一九三六)では「仏力・法力により地獄の苦を脱すること破地獄といい、破地獄のために称える誦文を破地獄の文という。人が三宝を信ずれば善趣に生れ、信ぜざれば悪趣に墮する」という觀念に発しているものと思われる。本生経類・譬喩経類には、種々の危難に陥り、または羅刹の牢城や地獄に遭遇した人々が「南無仏」を称えてその危難を免れるというモチーフを有する物語が数多く見出される。また地獄に堕ちた者が、崇高な精神を発揮したために、天界に生まれ変わったという物語もある(例えば、雑宝蔵経卷一、慈童女の縁)。大乘経典について見るならば次の如

きものがある。」とし、次の五つの用例があげられている。

(一) 新訳華嚴經卷十九(夜摩天宮品) 覺林菩薩の偈「若人欲了_レ知、三世一切仏、應觀_二法界性、一切唯心造_一」。唐の文明元年洛陽に王明幹なるものがあり、死して地獄に至った。時に地蔵菩薩、地獄の門前にありてこの偈を授け、これを誦すれば地獄の苦を除くべしと告げた。門内に入りて閻羅王に対してこの偈を誦したところ、法験により地獄の苦をまぬがれたという(華嚴經大疏鈔十九上、宗鏡錄九、仏祖統記三十三、往生要集下)。

(二) 無量壽經卷下に出る偈文「其仏本願力、聞_レ名欲_二往生_一、皆悉到_二彼国_一、自到_二不退転_一」小乗戒の人、唐の玄通律師は、破戒して死後閻羅王の許にいたる。この偈を説くに閻羅王大いに驚き、西方弥陀如来の功德を説くものなりとして礼拝したという(和語灯録卷一)。

(三) 觀無量壽經には「南無阿弥陀仏」を称えれば衆々の罪障を滅し地獄の苦をまぬがれると説く。

(四) 法華經の十如是の文、また譬喩品の「如来已離_二三界火宅_一、寂然閑居、安_二处林野_一、今此三界、皆是我有、其中衆生、悉是吾子、而今此処、多_二諸患難_一、唯我一人、能為_二救護_一」の文等も破地獄の文とされる。

(五) 「俺阿謨伽尾盧左囊」等の真言もこの種の中に数えうる(不空羼索神變真言經卷二十八)。また元亨釈書卷九によれば、空海の門人智泉は地蔵軌によりて破地獄法を修したという。これらは、地蔵菩薩、阿弥陀如来、光明真言等による破地

獄の思想である。

- (47) 『大正蔵』一九、三五〇上
- (48) 『大正蔵』一九、七一上
- (49) 『大正蔵』二〇、六四四下
- (50) 『大正蔵』一九、六三八上
- (51) 『大正蔵』一九、二二九上
- (52) 松長『一九九八』、二三八頁
- (53) 『大正蔵』二〇、三八四下〜三八五上
- (54) 『大正蔵』二〇、四六〇中
- (55) 此の印を作す時、地獄の門開きて受苦の衆生一時に解脱し、焰摩羅王心に歓喜を生ず。觀世音菩薩大慈大悲を以て、衆生を憐愍するが故に、此の法を説きたまふ。
松長『一九九八』二三八頁、参照。
- (56) 『大正蔵』一八、九一四下〜九一五上
- (57) 『廣辭苑』第六版(岩波書店、二〇〇八)一五七七下
- (58) 『廣辭苑』第六版(岩波書店、二〇〇八)六二九下
- (59) なお、『三種悉地軌』の序分は、『破地獄陀羅尼軌』とほぼ同文である。
- (60) 『大正蔵』一八、九一二中
- (61) 『破地獄儀軌』(『大正蔵』一八、九一二中〜下)・『破地獄陀羅尼軌』(『大正蔵』一八、九一四下〜九一五上)
- (62) 『仏頂尊勝陀羅尼經』とその儀軌の分類に関しては、佐々木【二〇〇九A】に詳しい)
- (63) 善住天子の因縁による破地獄の思想は、一連の『仏頂尊勝

陀羅尼經』に説かれるものである。

・ 仏陀波利訳『仏頂尊勝陀羅尼經』（『大正藏』一九、九六七番、三五〇上）

・ 杜行顗訳『仏頂尊勝陀羅尼經』（『大正藏』一九、九六八番、三五三上）

・ 地婆訶羅訳『仏頂尊勝陀羅尼經』（『大正藏』一九、九六九番、三五五下）

・ 地婆訶羅訳『最勝仏頂陀羅尼淨除業障呪經』（『大正藏』一九、九七〇番、三五七下）

・ 義浄訳『仏頂尊勝陀羅尼經』（『大正藏』一九、九七一番、三六一下～三六二上）

（64） 佐々木【二〇一一】五七頁

（65） 『大正藏』一九、三四九下～三五〇上

（66） 『大正藏』一九、三五〇上

（67） 『大正藏』一九、三五〇中

（68） 『大正藏』一八、九一四上

（69） 『大正藏』一九、三六八中